

## 岐阜県博物館との関わり

岐阜県博物館元館長

石田 克



人生いろいろな縁があります。

私は大学で、熊石洞産の哺乳類化石を卒論の題材としました。その頃、岐阜県博物館開設準備室の笠原芳雄先生が大学を訪れられ、私が卒論の話をする時、「岐阜県に総合博物館ができる。自然系の専門学芸員を採用する予定なので、ぜひ希望してみてください。」というお話を伺い、その気になって、学芸員資格をとりました。ところが、岐阜県博物館は原則として教員から学芸部員を採用することになりました。そこで教員になることにしました。

岐阜県の教員になって初めて岐阜県博物館を訪れたところ、ヤベオオツノジカの復元骨格が展示されていました。これは、日本で最初に作られたヤベオオツノジカの復元骨格四体のうちのひとつで、その骨格には郡上高校生物部の生徒が発掘した熊石洞産標本も使われています。

平成十三年、高校教員を二十年あまり務めた後、自然担当チーフとして岐阜県博物館に勤めることになりました。ようやく学芸員資格が活用できるよう

になりました。

チーフとしての在任は四年間でしたが、温泉展、キノコ展、里山展などの自然関係の特別展・企画展に関わりました。どの企画も、担当学芸員の力量が十分発揮された素晴らしい企画でした。またステゴサウルス骨格模型の購入なども担当し、充実した日々を過ごすことができました。

その後、学校現場に戻った後、学芸部長として一年、また学校現場に戻った後、岐阜県博物館長兼岐阜県ミュージアムひだ館長として一年、博物館の運営に努めました。高校で定年を迎えた後、今度は岐阜県博物館の図書資料室で四年間務めました。合わせて十年間、岐阜県博物館に勤務したことになります。

図書資料室勤務時には「岐阜県博物館協会五十周年記念誌」作成に関わりしました。その折には、協会の歴史と共に岐阜県博物館の歴史を振り返ることができました。県博開設にあたっては多くの方々のご尽力とご支援をいただいたことがよくわかりました。

博物館の運営には、さまざまな方々のご支援をいただいています。専門家の方々はもちろんですが、サポーターの方々や、行事の運営や博物館資料の収集研究に関われる方もあります。

また、常にご支援をいただいていたのが岐阜県博物館友の会の方々です。皆さんが県博を楽しみながら支援していただいたおかげで、館も発展してきました。友の会運営のミュージアムショップには小さいながらも質のよい品物を安価で提供いただいております、私もショップで購入した化石・鉱物等を教材で使っています。

現在の私は、高校の非常勤講師や図書館講座、地域学講座などで、ショップで購入した化石などを材料に地球の歴史を紹介しています。実物化石鉱物などに接することは生徒や地域の方々などに大きな感動を与えます。多くの方々に郷土の歴史と自然について関心と理解を深めてもらえるよう努めています。

コロナ禍で、博物館へ足を運ぶ機会も減りました。一方情報化社会の中で、ネット環境から多様な知識データを得ることはできるようになりました。しかし、岐阜県の自然・歴史・文化に直接ふれることのできる岐阜県博物館の重要性は変わりません。

岐阜県博物館と岐阜県博物館友の会の益々のご発展を祈念いたします。

## 企画展\*

# 「天下人 家康と美濃の諸将」紹介

岐阜県博物館 学芸部 安藤 均

岐阜の地は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人が統一権力を形成していくなか、重要な役割を果たしました。慶長5年(1600)、東西両軍は岐阜城の戦いをはじめとして美濃の各地でしのぎを削り、ついに関ヶ原の合戦で家康が政権の帰趨を決しました。一連の戦いの舞台となった美濃の勢力図は家康主導のもとで大きく塗り替えられ、幕領・小藩領・旗本領が混在するようになりました。本企画展では家康との関わりが深い諸将に焦点を当て、彼らゆかりの文化財の展示や城館の紹介を通じて、「天下人 家康」の時代、すなわち関ヶ原合戦から家康が没するまでの15年ほどで美濃の勢力図がどのように変化していったかを探ります。

第一章「関ヶ原合戦と美濃の領主たち」では、最初の関ヶ原以前に美濃で最大級の領主であった織田秀信および岐阜城の戦いについて、秀信期の岐阜城跡出土品などを通じて紹介します。続いて様々な領主に触れていきますが、美濃では極めて多くの小領主が分立していたため、全てを紹介することはできません。そこで、西濃では竹中重門・高木貞利、岐阜では加藤貞泰、中濃・郡上では大島光義・遠藤慶隆・長谷川守知、東濃では遠山友政といった各地の大名・旗本について古文書などから取り上げます。

第二章「家康と加納藩奥平家」では、特に家康とのつながりが深い加納藩奥平家について紹介します。奥平家は家康の長女亀姫が嫁いだ家で古くから家康とのつながりが強く、娘婿の信昌は関ヶ原合戦後の美濃では最大規模の大名でした。まず、信昌は関ヶ原合戦後に京都所司代として残党処理を行ったことを伝える記録類を紹介します。続いて信昌の居城である加納城の様相を瓦や出土遺物、絵図などから捉えていきます。ま

た、加納藩は家康から美濃の押さえとして期待されており、大坂の陣でも美濃の中心的存在を期待されていたことを示す史料も紹介します。

第三章「幕領美濃と代官」では、美濃で多くを占めた幕領がどのように統治されていったのかを大久保長安・岡田善同という二人の代官の姿からとらえていきます。長安については、街道整備や石見検地に関する史料を紹介します。その長安の後継善同は関ヶ原合戦後に可児郡を中心に統治しました。善同が幕府献上品である蜂屋柿の生産にも重要な役割を果たしていたことを示す史料、善同が代官を務めるにあたって自身の屋敷に送った書状や屋敷跡からの出土物を展示します。

家康によって、変わっていく美濃の様子とそこで拠点を確立する諸将の姿に思いをはせてもらいたいと思います。



▲徳川二十将図(部分)(東京 太陽コレクション蔵)

マイミュージアムギャラリー 第7回展示  
「おひなさまのセカンドライフ 福よせ雛」  
令和5年2月4日(土)～3月19日(日)

岐阜県博物館 学芸部 浅野 伸保

令和4年度の第7回目は、みたまち 御嵩町福よせ雛実行委員会さんによる「おひなさまのセカンドライフ 福よせ雛」を開催します。

「福よせ雛」とは現代の諸事情によりご家庭で飾ることができなくなったお雛様や、まだ美しいままやむをえず手放さなければならないお雛様をもう一度何かの役に立ててあげたい、という持ち主様の思いを受けて発案されました。

お雛様たちはみんなに笑顔と福を呼ぶ「福よせ雛」に生まれ変わり、人や施設や地域をつなぐキュービッド役として展示されます。どうぞ、ご覧ください。



▲展示例

登録有形文化財「旧宮川家住宅主屋」  
の公開活用事業について

岐阜県博物館 学芸部 長野 宜延

百年公園内にあります登録有形文化財(建造物)「旧宮川家住宅主屋」に関する事業の進行状況について、ご説明します。文化庁の国庫補助を受けた公開活用に向けた修理、令和4年度は、昨年作成した実施設計書に基づいて、耐震補強工事の施工、屋根の葺き替えの準備を進めるとともに、来年度予定の防災・防犯設備設置工事の設計書を作成しています。

現在、民家の周囲を素屋根、足場で囲んだ状態で作業が進行中です。10月末時点で屋根の茅の撤去が終了し、屋根は骨組だけの状態です。1月現在、本格的に耐震補強工事中です。傷んでいる部材を交換するために、民家全体が少しだけ持ち上げられた様子は令和5年1月11日のツイートで紹介しました。この後、防災・防犯設備設置工事に入っていきます。



左上：仮囲い 左下：骨組だけの屋根  
右：twitterの記事

岐阜県博物館【公式】  
@gfkupaku  
現在、順調に進行中の #旧徳山村民家の耐震補強工事のご報告です。  
傷んでいる部材の交換をするために、民家全体が少しだけ持ち上げられました。  
車のタイヤ交換のように、ジャッキアップで上がっています。あの大きな民家が2cmほど上がっていること自体すごいことです。  
#岐阜県博物館





## 「皆既月食」

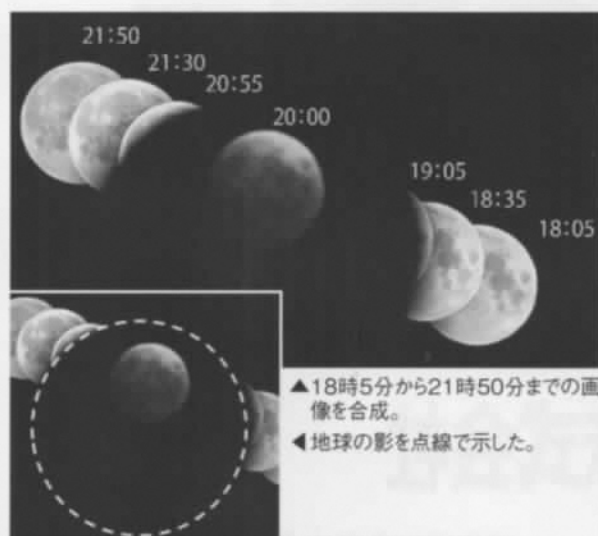
岐阜県博物館 学芸部 熊澤 忍

2022年11月8日、皆既月食が起きました。

皆既月食は、太陽と地球と月が一直線に並び、地球の影に月がすっぽりと入ることで起こる現象です。食開始と共に少しずつ月が欠けていく様子は、大変見応えがあり、特に皆既食中（地球の影に月が完全に隠れた状態）の赤銅色に染まった月には神秘的なものを感じます。ではなぜ陰に隠れてしまったはずの月は真っ暗にならず、赤銅色になるのでしょうか。これには、地球の大气が関係しています。太陽光は地球の大气によって屈折し、影の内側まで回り込むようになります。さらに、太陽光が大气を通過する際には、空気分子などによって青色に近い光は散乱しほとんど通過することができません。よって、皆既食中は赤色に近い光が月を照らすこととなり、赤銅色に見えるのです。

月食の面白さは皆既食中の月の色だけではありません。月にできた影の形にも注目してみてください。「地球は丸い」ということがよく分かると思います。

2023年は10月に部分月食が起きます。赤銅色の月は見られませんが、ぜひ影の形に注目してください。



▲18時5分から21時50分までの画像を合成。  
◀地球の影を点線で示した。

## オニバス *Euryale ferox* Salisb. ってどんな植物？ ～低地に生育する特徴ある植物～

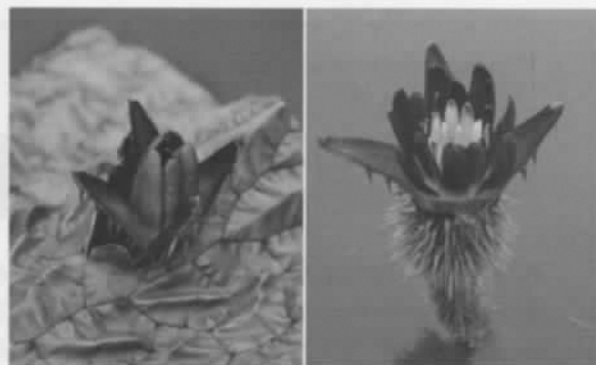
岐阜県博物館 学芸部 土屋 寿美

オニバスは、日本在来の1年草水草で、1mを超える大きな葉が特徴です。オニバスといえば、葉に人が乗る様子が思い浮かびますが、あのオニバスは南米原産「パラグアイオニバス」です。オニバスの名は、棘のあるハスのような姿に由来しますが、ハス科ではなくスイレン科に属します。また、葉の表裏や茎、花の萼に鋭いトゲがあり、胴長を突き抜けるほどです。そのため、堀田の水路に生えると田舟の邪魔になるため、以前は駆除されていました。現在は数が減り、絶滅危惧種（環境省Ⅱ類、岐阜県Ⅰ類）に指定されています。

オニバスは花にも特徴があり、花が開く「開放花」と花が開かない「閉鎖花」があります。どちらの花も成熟すると種子をつくり、子孫を残すはたらきをもちます。開放花の近くでは、あまく良い匂いがします。この匂いに集まる昆虫に花粉を運んでもらう虫媒花ですが、開花時間が短く水中に生えることもあり効率が良くありません。しかし、オニバスの花は両性花で、1つの花におしべとめしべがあるので、ほとんど水中にある閉鎖花でも自家受粉で子孫を残せます。

どちらの花も実が完熟すると「ボンッ」と大きな音を出してはじけ、50～100個程の種子が水面に飛び散ります。種子は発芽に数年程かかりますが、60年も発芽能力を失わなかったという話もあります。一方で、発芽率は約1割と低く、他の植物との競争に負けてしまう原因となっています。

昔は種子を薬にしたり、茎を食べたりした身近な植物の1つでしたが、今では絶滅の危機に瀕しているのが現実です。



▲葉を突き破るオニバスの花(左)と開放花(右)

## 会員の声

### 博物館の楽しみ方

岐阜県博物館 友の会 田淵 亜美

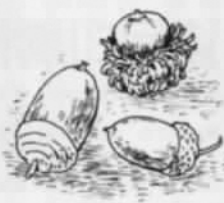
4歳の娘ともうすぐ2歳になる息子。少し大きくなったことで、博物館でできることが少しずつ増えてきました。

まず娘は、先日けんぱく教室のわくわく体験に参加しました。わくわく体験は、やさしい化石取り出し体験や化石レプリカづくりなどを体験できるもの。普段私たちは、博物館に土曜日に行くことが多いですが、その日はたまたま日曜日に行き、この催しに出会うことができました。まず驚いたのが大行列ができることです。開始30分前より並ぶことができたのですが、あれよあれよという間に大勢の人が集まり、人気の催しであることがわかりました。その日私たちは、化石レプリカづくりとどんぐり標本箱づくりの2つを体験しました。体験料が100円から200円程度なのも魅力の1つです。

化石のレプリカづくりは、本物の化石からつくったシリコンの型に、石こうと水を混ぜたものを入れて、固まれば完成というもの。4歳の娘にできるか不安でしたが、娘も楽しんで取り組むことができました。どんぐりの標本箱づくりは、いろいろなどんぐりから好きなどんぐりを選んで、ボンドで箱に貼り付ける作業です。娘は、たくさんあるどんぐりから、お気に入りのどんぐりを真剣に選んでいました。ボンドで貼って、名前のシールを貼って完成です。これは、私がお手伝いして2人で完成させました。娘は、2つの作品に大満足。家に帰って、さっそく飾りました。

そして、息子かというと、先日博物館デビューしました。博物館に着くなり、見たことのない景色に興味津々でしたが、動物の剥製を見ると怖くて固まってしまいました。1歳の息子から見ると動物の剥製は、大きく迫力があつたのでしょう。それから、ずっとママの側を離れませんでした。

成長とともに、ますます楽しめるようになった博物館。これからもどんな風楽しんでくれるか、わくわくしています。



## 会員の声

### 貞奴さんがつなげてくれたもの

創作オペラ「貞奴」プロジェクト事務局長  
岐阜県博物館 友の会 藤田 敦子

各務原に菩提寺・貞照寺と別荘・萬松園を建てた日本初の近代女優「川上貞奴」。彼女を顕彰してオペラを創作する団体に活動しています。

生誕150周年となった2021年、貞奴さんが女優引退後に深く関わった木曾川の水力発電事業を中心に、市民オペラ「ドラマチック木曾川—Opera貞奴—」を制作して翌2022年1月に初演しました。新型コロナ禍にありながらも制作過程では様々なご縁をいただきました。欧州で成功し帰国した貞奴さんらが本拠地とした神奈川県茅ヶ崎市で活動する「音貞塾」「音貞オペケ祭実行委員会」とは、Zoomによる「ゆかりの地フォーラム」で交流が深まりました。名古屋にある貞奴さんと福沢桃介さんゆかりの「二葉館」も同様です。また、SNSを通じ、貞奴さんを表現するオリジナル舞踊作品の再演を予定していた現代舞踊家の倉知可英さんともつながり、2022年7月の「第1回貞奴芸術祭～清流編～」で鶴沼の農村歌舞伎舞台「皆楽座」にお招きできました。その他にも数多くのご縁を得ました。

「ドラマチック木曾川」の初演は終わりましたが、「貞奴さん」をキーワードに各務原だけでなく木曾川流域を中心に岐阜県、全国へと少しずつご縁が広がっています。まさにドラマチック。この草の根の交流が大きく育つことを願い、時代と表現の最前線に立ち続けた貞奴さんに敬意を払いつつ今後も誠実に創作活動に取り組んでいきます。今の目標は没後80周年となる2026年。どんな作品を創り上げられるのか、ワクワクしつつ気の引き締まる思いです。



(2022年11月27日の村国座  
「第1回貞奴芸術祭～紅葉編～」より出演者一同)

## 「恐竜化石コンテンツ」の運用を始めました

岐阜県博物館 学芸部 則竹 裕嗣

今年度の博物館のデジタル推進事業として、「恐竜化石コンテンツ」を2件制作しました。

1件目はARアプリの制作です。当館が所蔵している恐竜の全身骨格復元三種（イグアノドン・アロサウルス・ステゴサウルス）にお手持ちのスマートフォン、タブレット等をかざすと、復元された恐竜の生体像を360度自由な角度から鑑賞することができます。さらに写真撮影も可能であり、復元された恐竜と一緒に記念撮影することもできます。



2件目はVR制作です。当館に展示されている「イグアノドン」や「アロサウルス」などの恐竜が、約一億年前の世界でどのように生きていたのかを、VR技術で再現しました。専用のヘッドアップディスプレイを通して、360度恐竜の世界を体験することができます。



「恐竜化石コンテンツ」の導入により、今は絶滅して見ることができない恐竜の姿を見ることができ、恐竜を含めた博物館の魅力をより身近に感じることができていると思っています。

友の会の皆様におかれましては、このようなデジタルコンテンツが導入されたことをお知り合いの方に広めていただければ幸いです。4月より博物館法が改定され、博物館資料のデジタル・アーカイブ化が示されています。デジタル・アーカイブ化された当館の資料が多くの方にとって身近でわかりやすいものになることを願い、これからも工夫を重ねていきたいと思っています。

## 岐阜県博物館からのお知らせ

### 2月～3月の展示・行事のお知らせ

#### ◆特別展

「パレオアート作品展 二人のパレオアーティスト」  
12月9日(金)～2月26日(日)

#### ◆企画展

「天下人 家康と美濃の諸将」  
2月4日(土)～3月19日(日)

※本誌2ページに詳細な紹介があります。

#### ◆マイミュージアムギャラリーの展示

「おひなさまのセカンドライフ 福よせ雛」  
2月4日(土)～3月19日(日)

※本誌3ページに詳細な紹介があります。

#### ◆博物館展覧会・講演会・催事の変更について

新型コロナウイルス感染拡大防止等のため、変更があることがあります。ホームページ、ツイッターまたはお電話でご確認ください。

## 友の会事務局からのお知らせ

### ★令和4年度後期友の会の主な活動について

#### ○秋季理事会の報告

10月13日(木)に開催され、①令和4年度会務中間報告、②一般会計・特別会計中間報告、③後期の会務、について承認していただきました。そのなかで、探訪の旅、「七草がゆを食べよう」については新型コロナ感染拡大の第7波はピークアウトしたものの第8波が懸念(10月時点)されるため中止としました。

#### ○3月11日(土) 会長・副会長会議

### ★図録の刊行について(後期分)

「パレオアート作品展 二人のパレオアーティスト」12月  
「天下人 家康と美濃の諸将」2月

